

漢字のうた【師範代養成コース 三段】

1

熟^{にきた}田^つ津^{ふなの}に船^{ふね}乗り^のせむと月^ま待^{まち}てば潮^{しほ}もかな^いひぬ今は漕^こぎ出^いでな

あかね^あさす^{むらさきの}紫^{むらさき}野^の行き^{しめ}標^の野^の行き^の野^の守^{もり}は見^みずや君^{きみ}が袖^{そで}振^ふる

石^いばし^わる垂^{たる}水^みの上^ののさ^{わら}ふ^ひの萌^もえ出^いづる春^{はる}になり^にける^かも

わが屋^や戸^どのい^いささ^{むらたけ}群^{むら}竹^{たけ}吹^ふく風^{かぜ}の音^ねのか^かそけ^けきこの夕^ゆか^ゆも

淡^お海^{うみ}の海^{うみ}夕^ゆ波^{なみ}千^ち鳥^{どり}汝^なが鳴^なげば情^{こころ}もしの^に古^{いにし}思^えほゆ^オ

(『万葉集』所収の和歌、短歌と同じリズムの歌)

2

天^{あめ}地^{つち}の分^{わか}れし時^{とき}ゆ神^{かみ}さびて高^{たか}く貴^うき

駿^{する}河^がなる布^ふ士^じの高^{たか}嶺^ねを天^{あま}の原^{はら}振^ふり放^{はな}せ見^みれば

渡^{わた}る日^ひの影^{かげ}も隠^{かく}らひ照^てる月^{つき}の光^{ひかり}も見^みえず

白^{しら}雲^{くも}もい^い行き^{いき}はばかり時^{とき}じくそ雪^{ゆき}は降^ふりける

語^{こと}り継^つぎ言^いひ継^つぎ行^いかむ不^ふ尽^じの高^{たか}嶺^ねは

(『万葉集』所収の長歌)

天地^{てんち}が分^{わか}れたときから、神々^{かみ}しくて貴^うい駿^{する}河^がの富^ふ士^じの高^{たか}嶺^ねは、太陽^{たいやう}の光^{ひかり}を隠^{かく}し、月^{つき}の光^{ひかり}を遮^さり、白^{しら}雲^{くも}も行き^{いき}滞^{とど}まり、常^{つね}に雪^{ゆき}が降^ふっている。いつの世^よまでも次^{つぎ}々に語^{こと}り伝^{つた}えていこう、富^ふ士^じのこ^{こと}は。

故人西のかた黄鶴楼を辞し ※「故人」は、古くからの友人のこと。

煙花三月揚州に下る

孤帆の遠影碧空に尽き

唯だ見る長江の天際に流るるを

(李白『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』)

国破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を濺ぎ

別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火三月に連なり ※「烽火」は、のろし、「三月」は、三か月のこと。

家書万金に抵たる ※「家書」は、家族からの手紙のこと。

白頭搔けば更に短く

渾べて簪に勝へざらんと欲す ※「簪」は、かんざしのこと。

(杜甫『春望』)

戦火のため、国都、長安は破壊されてしまったが、山河は昔のままである。城壁に囲まれた街にも春が訪れ、草木が青々と茂っている。時世のひどさを思うと悲しくなり、花を見ているだけで涙が出る。家族と離れて暮らす我が身を思うと、鳥の鳴き声にさえ不安を覚える。戦いののろしは三か月にも及んでいる。それゆえ、家族からの手紙は何物にも代えがたい。白髪頭は、かけばかくほど短くなり、とうとうかんざしもさせないほどになってしまった。